

ANNUAL REPORT

活動報告書

2021-2022

Manabi to

認定NPO法人 まなびと

まなびについて

やりたいことが見つかるまでの“待ち時間”

やりたいことがはっきりしていると自分が何をすべきかが明確になったり、周りの人がアドバイスをしてくれたりする。思い描いたことが形になり、人生が前に進み始める。一方で、やりたいことが見つからないと、自分が何をしたらいいのかが分からず、周りもどうやって手を差し伸べたらよいのかが分からなくて、状況が変わっていかない。人生が同じようなことの繰り返しで、歳を重ねる内に周りの人にはおいていかれているような感覚になり、徐々に孤立して、世界が縮小していってしまう。そうになると、新しい刺激が少なくなると、やりたいことが見つかりづらい状況にどんどん追い込まれてしまう。

まなびとは、やりたいことが見つからない人でも「あなたはあなたで居ていい」と受け入れられる居場所と、新しい価値観や生き方に出会える多様な人との関わりがある、“待ち時間”を大事にしています。やりたいことがなくても、居場所を得ながら自分のペースで世界と出会っていくことで、ひょっとしたらいつかやりたいことが見つかるかもしれないという前向きな気持ちで日々を過ごすことができる。やりたいことが分からない人でも、“待ち時間”があることで「生きよう」と思える、そんな社会にしたいと考えています。



代表メッセージ

僕は子どものころから「沢山勉強して、いい成績をとって、いい学校に通い、いい大学に入って、いい会社に勤めたら、いい人生が待っている」と考えて生きてきました。でも中学から高校に進学するタイミングで両親が離婚したことがきっかけで、段々と家庭が自分の安心できる居場所ではなくなり、学校にも通いづらくなり、孤独感を感じながら生きるようになりました。一年の浪人生活を経て大学に進学しても、周りの同級生は勉強やサークルなど自分のやりたいことに取り組んでいる一方、自分自身はどこか孤独感を抱え、夜眠るのも辛くてなかなか大学にも足を運べない日々が続きました。

何とか周りに認めてもらいたい、自分のことを見つけてもらいたいという一心で就職活動に取り組み、内定をもらった企業は「年収1千万以上もらえる、業界一番手の、誰もが知っている企業」で、そこに自分のやりたいことがどれだけあるのかは全く分からなかったです。結局就職しても、大学時代と同じ、孤独感や苦しさが続くのかという閉塞感が日に日に募りました。そして、卒業するはずだった大学5回生の2月、卒論を書く手が止まってしまい、僕は大学を卒業できず、内定を辞退することになりました。

卒業もせず、就職もしないことが決まってから数週間は、殆ど何も手につかず、ただ寝てばかりの生活でした。何かをしようとしても、それが人生の何になるのか全く分からず、すぐに手が止まっていました。最終的に、本当にやる事がなくなって、自宅の地下室からシャベルを取り出して、自宅の裏に穴を掘り始めました。

なぜそんなことを始めたのか、よくわかりません。でも穴を掘ってみて、ただ掘り続ける行為に目的も意味も考えなくて良かったのが当時の自分には楽だった、その感覚は残っています。結局、穴掘りは1か月間毎日続いて、大人一人がすっぽり収まるほどの穴が掘れました。

穴を掘ってみて、一番実感したのは、「自分がやりたいことをどんなに小さなことでもやってみたらいいんだ」ということでした。そう思えたのは、1ヶ月間24歳の息子が大学にもいかず、就職もせず家の裏で穴を掘り続けていても何も言わずに毎日生活の世話をしてくれた父がいたからです。その時間を過ごしたことで、自分がいい大学に行っていたり、仕事をしているから家にいいのではなく、ただ自分が生きているということを支え、喜んでくれる人がいるのだということに気づきました。だから、誰かから認められるために自分がやりたいかどうか分からないことを頑張るよりも、自分がやりたいことをやらないと自分の人生がもったいないと思えるようになりました。

それからは、ランニングやフットサルを始めたり、バイトをしたり、スノーボードに出かけたりと今までやりたくもなかなかやることがなかったことにチャレンジしてみました。そして、ひょんなことから海外旅行でタイに行くことになりました。

そのころの自分は、25年間悩み抜いた末に幸せに生きるための最終奥義を手に入れたような気持ちでいました。でもタイに行ってみて、日々を楽しんで過ごすことにエネルギーを注いでいる現地の人たちの姿を目の当たりにして衝撃を受けました。仕事中でも恋人と電話をしていたり、ショーケースの上でカップラーメンを食べたり、家族や友人と過ごす時間を大事にしていたり、自分が日本で生きている中では想像もつかなかった働き方や生き方でした。そこで初めて、価値観が違う、というのはこういうことなのかと気づきました。そして、自分の幸せを考える上では、多様な価値観を知ることによって色んなものの見方が出来るようになる必要があると考えようになりました。

僕は、こういった経験を通じて、やりたいことが見つからずに落ち込んでしまう人に対して、そういうときもあるのだということと自他ともに受け入れることができる居場所と、そこで出来るだけ多様な価値観や生き方に触れられる人との関わりを届けたいと考え、まなびとを設立しました。そして、やりたいことを見つける自己探求の時間は子どもから大人まで、国籍や障害の有無関係なく、誰にとっても必要なものだから、地域にいる皆がアクセスできることを目指しています。そのために、子どもを対象とした学童保育や遊び場などの事業を行ったり、外国人を対象とした日本語教室の事業を行ったりと様々な人たちがまなびとに入りやすい入り口を作っています。そして、一度まなびとに関わったら、そこから色んな人との出会いが広がっていくように、交流イベントを開催したり、プロジェクトを越えた活動を企画したりしています。また、人との関わりを通じて一人ひとりが何を学び、どのように世界が広がっていったかを共有し合う機会を定期的に設けることで、関わる人たちがお互いの自己探求を支え合い、それぞれにやりたいことを見つけていける場作りを心掛けています。

すべては、やりたいことが見つかるまでの“待ち時間”を豊かにするために。是非、まなびとの取り組みを一人でも多くの人に知っていただき、一緒に活動していただけたら嬉しいです。

理事長 中山 迅一

沿革

2013	9月	学際団体IROHA 設立			
2014	1月	任意団体 まなびと設立	放課後学習支援教室アシスト妙法寺校 開校		
	4月			日本語教室だんらん立ち上げ	
	6月		放課後学習支援教室アシスト甲子園校 開校		
	7月		放課後学習支援教室アシスト苦楽園校 開校		
	12月	特定非営利活動法人まなびととして法人登記	放課後学習支援教室アシスト摩耶校 開校		
2015	3月		放課後学習支援教室アシスト苦楽園校 閉校		
	4月		放課後学習支援教室アシストを放課後学びスペースアシストに改名		
	7月		放課後学びスペースアシスト妙法寺校 閉校		
	10月		放課後学びスペースアシスト学園都市校 開校		
2016	4月		放課後学びスペースアシスト六甲校 開校		
	8月			神戸こども探検隊始動	
	12月	まなびと灘区拠点 開所		日本語教室だんらん王子公園校 開校	
2017	3月		放課後学びスペースアシスト摩耶校 閉校		
	7月				民間学童保育施設北野くん家 開所
	8月	特例認定NPO法人になる			
	10月			日本語教室だんらん豊中校 開校	
	11月				
2018	2月				第二回まなびと文化祭WASSHOI!
	3月			日本語教室だんらん豊中校 閉校	
	4月	まなびと北野基地 開所			
2019	2月			日本語教室だんらん王子公園校 閉校	第三回まなびと文化祭WASSHOI!
	4月				ちいき食堂始動
2020	3月		放課後学びスペースアシスト 六甲校 閉校		
	6月			だんらんオンライン スタート	
	8月	認定NPO法人になる			
	9月		放課後学びスペースアシスト神戸真生塾校 開校		
2021	3月		放課後学びスペースアシスト学園都市校、甲子園校 閉校		
	4月	まなびと北野基地 移転	放課後学びスペースアシスト神戸北野校 開校	居住支援事業開始	つながりMusic Lab.神戸北野教室 開設 民間学童保育施設北野くん家 移転
	6月				CAFÉ&BARまどろ 始動
2022	3月			居住支援法人指定	
	12月			外国人留学生を対象とした食糧支援開始	
2023	2月			外国人人材発掘育成事業開始	



民間学童保育施設 北野くん家



子どもたちの放課後は最高の“待ち時間”

北野くん家では、子どもたちがやりたいことを見つけて、それに取り組める環境を作っています。時間割や予定されたプログラムなどは無く、その日どんな遊びをするのか、誰と遊ぶのかを一人ひとりが自分で決めています。そうやって放課後の時間を過ごすことで、自分のやりたいことは何なのか、それをするためにはどうしたらいいのかを考えることができます。また、色んな遊びを通じて子どもたち一人ひとりの得意を活かしたり、興味を広げたりすることも意識しています。ボードゲームや積み木といった室内遊び用おもちゃ、お絵描きや工作ができる空間、音楽室、ボルダリングスペースなどがあります。また、近くの公園にも遊びに行くことができます。

そして、北野くん家では何よりも人との関わりを大切にしています。子ども5人に対してスタッフが1人見守りにつきます。そうすることで子どもたちは自分の在り方を受け入れてもらうことができ、そのうえで他の子どもとコミュニケーションを取ると良いのか考えることができます。他の子どもと意思疎通が出来るようになると、相手の興味関心に惹かれて、やりたいことがまた生まれてくるのです。

● 学童保育って？

保護者が日中仕事などで子どもの見守りが出来ない家庭を対象に、小学生児童に遊びや生活の場を提供する事業です。北野くん家は、神戸市から補助を受けて民間が運営をする民設学童保育の仕組みを使って事業を運営しています。

● 地域の現状は？

北野くん家は、こうべ小学校区に位置しています。こうべ小学校は2022年度900名ほどの児童が通っていました。校区に繁華街や観光地が含まれ、交通量も多い一方、中心部に大きな公園などが少ないため、子どもたちが放課後に過ごせる場所が少ないという地域の課題があります。

まなびの待ち時間

利用者ボイス

「マジックを練習しているから見てほしい」ある日突然子どもが家で言ってきた。話を聞くと、「北野くん家」にマジックの得意なスタッフがいて、親身になって教えてくれるとのこと。さらに他にマジックが好きな仲間も多くなってきたことから「北野くん家」に新しいマジックの本まで買って置いてくれた話を楽しそうにしてくれた。2月、「北野くん家」を運営している「まなびの」が開催する文化祭「WASSOI!」でマジックを参加者に向けて披露している姿を見て誇らしい気持ちになった。

- ・活動日数:316日
 - ・利用者数:45名
 - ・利用者延べ人数:約4360名
 - ・スタッフ数:32名
 - ・利用者属性:
- | | | | | | |
|-----|-----|-----|----|-----|----|
| 1年生 | 18人 | 2年生 | 7人 | 3年生 | 4人 |
| 4年生 | 10人 | 5年生 | 4人 | 6年生 | 2人 |



スタッフボイス

「来てくれている子ども達に何か趣味を作ってあげたい」そんな思いをもってボランティアスタッフとして活動に参加。毎回の活動時にヨーヨー教室を開催することにした。ある子どもはそのヨーヨー教室をきっかけにヨーヨーで遊ぶことが大好きになり、お迎えで来られた保護者にその場で披露。そんな様子からお家でもヨーヨーが楽しめるように保護者から「ヨーヨーを買ってもらった」と嬉しく話してくれた。僕もとても嬉しくなった。



神戸 こども探険隊



探険するのは、みんなで一緒に遊ぶ時間

神戸こども探険隊では、子どもたちがみんなで一緒に遊ぶことにチャレンジしています。北野くん家では、一人ひとりが自分のやりたいことに取り組んでいるため、活動が個人もしくは少人数単位で行われることが多いです。また、地域の子どもたちも放課後は習い事などでバラバラに過ごすことが多く、10人以上で同じ遊びができる機会がありません。そういった背景があって、探険隊はみんなで一緒に遊ぶことからの学びを大切にしています。実際に遊ぼうとしてみると、最初のルール説明の段階でルールをちゃんと聞ける子、聞けない子、理解できない子、など色んな子がいます。実際に遊びが始まってからも、ルール通りに遊びたい子、はしゃぎたい子、輪に入れないままの子など、様々です。個人個人の在り方を大切にしながらも、みんなで遊ぶってどういうことなのか？どうすれば一人ひとりが楽しいのか？そういったことを子どもたちもスタッフも一緒になって考えます。そんな探険隊が大切にしているのが、心の安全です。みんなが楽しいのがいけれど、誰かが傷ついてしまうのは、嫌だよね。そんなことが起こってしまったときは、自分がどうしたらいいか考えてみようね、という話をしています。今年度も探険隊では様々な遊びを体験して、その中で子どもたちも色んな学びを得られました。

- ・活動日数:100日
- ・利用者延べ人数:約680名
- ・スタッフ数:10名



まなびの待ち時間

利用者ボイス

探険隊は刺激があるようでいつも充実した顔で帰ってくる。聞けば「学童では好きな遊びをしているけど、探険隊は大人が毎回違うゲームを考えて来てくれて色んな遊びが出来るし、普段一緒に遊ばない子も集まって遊んでいるから楽しい」とのこと。そういえば、違う学年の子に自然に挨拶している様子が先日あったのは、こういう関わりがあるからなのかとふと振り返った。やっていることはただの「遊び」なのだろうけど、学校や学童など普通の生活にない刺激があるこの場所は間違いなく我が子の成長に繋がっていると感じている。

スタッフボイス

「人と話すのが好きで、将来は中学校の教師になりたい」そんな志を持っていた私は探険隊のスタッフに応募したものの、ゲームの進行役を担当することすら緊張するほどだった。そんな状態からスタートした活動も今では「どうすればもっと子どもたちにとって楽しい時間を作っていけるのか」メンバー皆で相談・意見を出し合い日々試行錯誤して活動できている。子ども達からの「もう1回やりたい!」をもらいに今日も元気に活動に行きます。



放課後学びスペース アシスト

一人ひとりが自分なりの学び方を見つけられるように

放課後学びスペースアシストは、まなびとが設立した2014年から続けている事業です。塾の集団授業が苦手だったり、不登校を経験して周りの子と同じペースで勉強できなかったり、発達障害や学習障害があって学習において特別な配慮が必要だったりするお子さんが対象です。そんなお子さんに対して、本人がやりたいと思える形で学びの機会を届けています。利用するお子さんには、まずは勉強が出来なくても人として受け入れられていると感じてもらえるようなコミュニケーションを取り、その上で興味関心と結び付けて学校教科の要素にも徐々に触れてもらうようにしています。

- ・生徒:実人数 8名 のべ230名
- ・活動日数:119日
- ・スタッフ数:3名
- ・利用者属性:小学生4名 中学生3名 高校生1名

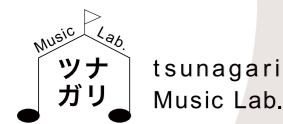
まなびとの待ち時間

利用者ボイス

アシストに来たら、自分の話をまず聞いてもらえた。そして、自分の興味があることだったら何をしてもいいと言ってもらえたことがとても嬉しかった。最初はYoutubeの動画を観るだけだったけれど、今は自分にとってどんな時間の過ごし方が必要かを先生と話し合っ、私が好きな歴史上の偉人について調べようとしている。あまり有名じゃなくて学校の図書館にはない偉人の本を選んでアシストの先生と一緒に読みながら意見交換をしていきたいと思っている。

スタッフボイス

子どもが本人のためにどうやって時間を使うのかと一緒に考えることを大切にしている。小学6年生の子どもから、大人からは勉強しろと言われるが、自分はそう言われるとやる気がなくなってしまう、どうしたらいいのか、と相談されたことがあった。そういうことを自分に話してくれることが嬉しかったし、ここまで一緒に過ごした時間がちゃんと繋がってきているのだと手ごたえを感じられた。聞かれた質問に正解はないと思うが、一緒に考えられる関係性をこれからも大切にしたい。



ツナガリ Music Lab.

やりたいことに向かって小さなステップを進んでいく

ツナガリMusic Lab.は、「子どもたちの自己肯定感を育てる」を理念とし、障がいを持つお子さんでも通うことのできる、音楽教室プログラムです。子どもたちの「できる」という成功体験を積み重ねるために、オーダーメイドでレッスンを行っています。母体は株式会社人と音色で、まなびとは神戸北野教室をフランチャイズ形式で2021年から運営しています。ツナガリMusic Lab.では、レッスンにABA(応用行動分析)の理論を取り入れており、レッスンを通して、音楽スキルのみならず、社会性、コミュニケーション面でのスキル向上も図っています。また、その手法を親御さんにもお伝えして、子どもも親もストレスなく良好なコミュニケーションが取れるようお手伝いしています。



- ・活動日数:120日
- ・利用者数:16名

まなびとの待ち時間

利用者ボイス

元々はあまり「自信がない」そんな子だった。それが「ツナガリ」教室に通い続けてきた事で徐々に自信が付き、そんな変化から学校での音楽の時間は付き添いの先生がいなくても一人で授業を受けられるようになった。最近行われた学校の音楽発表会ではドラムのオーディションに見事合格することができた。当日は緊張しながらもクラスの皆と堂々と合奏することが出来た。自らのペースで成長する姿を日々見守っている。

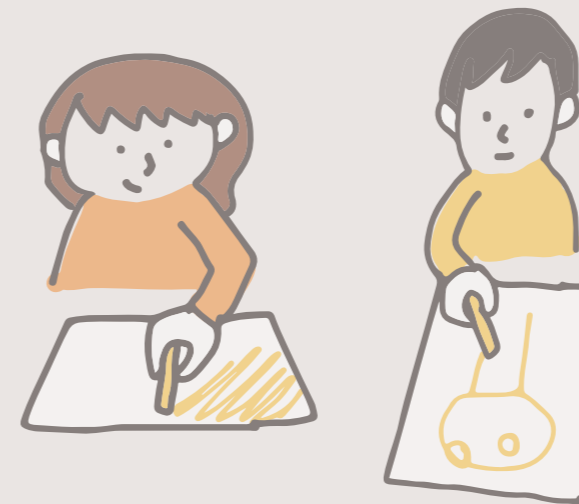
スタッフボイス

今年でツナガリ北野教室を担当させて頂き2年。私自身初めは元来の人見知りの性格や、「ツナガリ」での講師経験が浅い事からの不安もあり、保護者の方とのコミュニケーションはとて緊張していた。しかし、生徒さんと一緒に挑戦中の課題に取り組んでいる中で「出来た!」という瞬間の大きな喜びを保護者の方に報告させて頂く事や、レッスン外での日常の様子をお聞かせ頂く中で、共に成長を共有し合う事が出来る喜びへと変化していった。今ではレッスンの前後に保護者の方と関わらせていただくことも私の楽しみになっている。

多様な子どもの受け入れ

障がいを持つ子どもの支援

まなびとでは設立以来、放課後学びスペースアシスト、神戸こども探検隊、北野くん家の各プロジェクトで障がいを持つ子どもの受け入れを行ってきました。2021年からは障がいを持つ子どもたちとの関わりを増やすとともに、届ける支援の専門性を高めたいという考えから、ツナガリMusic Lab.を導入しました。2022年度は、北野くん家で職員の加配と、送迎支援を行うことで、障がいを持つ子どもの受け入れを強化しました。その効果で、受入数も増加し、子どもたち同士の交流も進みました。

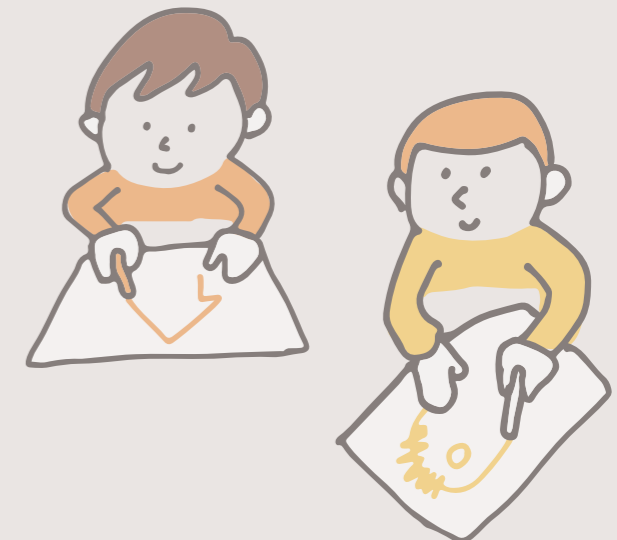


外国ルーツを持つ子どもの支援

神戸市中央区は、住民の10人に1人が外国人です。まなびともこれまで外国ルーツの子どもと多く関わってきました。2022年度は、まなびと文化祭WASSHOI!で外国ルーツの子どもも他の子どもたちと一緒に歌を披露しました。北野くん家においては宿題の支援や保護者に連絡する際に多言語対応を行いました。また、遊びの場面でも子どもたちがお互いのルーツを尊重しながら一緒に遊ぶことを学べるよう、スタッフが見守りを行いました。

ひとり親家庭の支援

ひとり親世帯の子どもと関わってきました。そのつながりを活かして2022年度からは、子どもだけではなくその保護者にとっての居場所となるため、生活相談を試験的に始めました。日々仕事と子育てに忙しいひとり親世帯の保護者は、自分の悩み、困りごとを相談できる場所が限られます。学童保育事業を行っているまなびとであれば、学童に登録する際に家庭の事情が分かるので、それ以上の負担なしに必要な支援に繋げることができます。また、困りごとが無いときでも、ちいき食堂などの場で地域との関わりを届けることができます。まなびとでは、ただ子どもを預かるだけではなく、学童保育を持つNPO法人が地域で果たせる役割を模索し続けます。





日本語教室だんらん(対面)



日本語で話したくなる友達と出会う

日本語教室だんらんは、外国人がただ日本語を学ぶだけではなく、日本での生活のことや、今後のキャリアについて、彼らが日本人と相談出来るということを大切にしています。日本語学校もしくは大学で勉強している留学生や、働いている会社員は、自分で日本語を勉強する手段は多々ありますが、実際に勉強した日本語を使って誰かとコミュニケーションを取る機会が不足しています。そのため、なかなか日本語力が向上せず、それに伴って日本人の友達も少ない現状があります。

2014年から活動している日本語教室だんらんでは、学習者と日本人のボランティアスタッフが1対1の対面で授業を行っています。授業では学習者が勉強したい教材やトピックを扱っています。文法、会話、もしくは留学生試験の学習など、ニーズも様々です。活動拠点がある神戸市中央区は人口の1割が外国人で、また外資系の会社や日本語学校などもあり、他区からのアクセスも良いので、学習者の出身国もアジア、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカなど様々です。

対面での授業を通じて交流を深めることはもちろん、プライベートで一緒に遊びに行ったり、日本文化を体験できるイベントやスポーツイベントを企画したりしています。学習者と先生という立場を越えた友達のような関係性を目指して活動を行っています。



- ・活動日数:94日
- ・利用者数:49名
- ・利用者延べ人数:約750名
- ・スタッフ数:50名
- ・利用者国籍

中国(7名)、台湾(6名)、韓国(1名)、ポルトガル(1名)、ペルー(2名)、ベトナム(2名)、ドイツ(1名)、シンガポール(1名)、イラン(1名)、イギリス(6名)、アルゼンチン(2名)、アメリカ(9名)、南アフリカ(1名)、モロッコ(1名)、マレーシア(1名)、イタリア(1名)、アイランド(2名)、フィリピン(1名)、カナダ(1名)、オーストラリア(2名)

まなびの待ち時間

利用者ボイス

だんらんでは教科書に載っていないような「実際の暮らしで使う日本語」を若い世代の日本人から自分のペースで学ばせてもらった。おかげで日本語に自信が持った。
僕は元々母国イランの建築会社で働いていた経験があり、日本に来て日本でも建築業界に入りたいと思って就職活動をしていました。だんらんの大学生スタッフも就職活動をしていたので、大学生スタッフと一緒に面接の練習をして、履歴書の書き方も教えてもらいました。だんらんのおかげで僕は日本の建築会社にエンジニアとして働くことを決めました。

スタッフボイス

「大学以外のコミュニティに所属したい」そんな気持ちと異文化交流・英語学習ができる場所を探してだんらんに出会った。毎回の活動では期待通り新しい価値観に触れ合うことができている。活動内で聞くことができる生徒さんからの母国の話は多様性を感じ、授業準備や振り返りの時間ではミーティングの進め方など別軸の学びがあることを日々痛感している。何かに参加することで、自分の考え以上にたくさんの学びがあるとだんらんの活動で感じたからこそ、今後も外国人向けの交流イベントには積極的に足を運びたい。



日本語教室だんらん(オンライン)



オンラインだからこそその関わりを模索し続ける

2020年4月、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、緊急事態宣言が発せられました。不要不急の外出を自粛するようになったことで、これまで対面の活動に参加していた外国人の日本語学習者やボランティアスタッフが活動を続けられなくなる事態となりました。自宅待機中の様子を伺うためにオンラインで交流会を開催したところ、多くの学習者が参加してくれました。それがきっかけとなり、オンラインでの日本語教室運営を行うこととなりました。

オンラインでの実施のため、活動の対象を神戸市のみではなく全国に広げ、ボランティアスタッフの募集も同様に全国に向けて発信したところ、学習者、スタッフ共に多数の問い合わせがあり、多いときは30名のスタッフと30名の学習者がオンラインに集う、というようなこともありました。

新型コロナウイルスの感染拡大が収まり、対面の活動が再開された後は、一時期ほどの参加者はありませんが、オンラインだからこそ参加することが出来る学習者やスタッフも一定数います。日々刻々と変わる社会情勢の中でオンライン日本語教室に求められる役割も変化していますが、学習者のニーズ把握とそれを実現できる体制づくりの両輪を回しながら、事業を運営しています。

- ・活動日数:240日
- ・利用者数:102名
- ・利用者延べ人数:約950名
- ・スタッフ数:207名
- ・利用者属性

アルゼンチン(1名)、イタリア(1名)、インド(2名)、インドネシア(1名)、ウズベキスタン(1名)、カナダ(2名)、シンガポール(2名)、タイ(2名)、チェルノブイリ(2名)、トリニダード・トバゴ(1名)、ネパール(1名)、パキスタン(1名)、バングラデシュ(2名)、フィリピン(2名)、フィンランド(1名)、ブラジル(1名)、ベトナム(5名)、ベナン(1名)、ポーランド(1名)、マレーシア(2名)、ミャンマー(2名)、ロシア(1名)、韓国(3名)、香港(1名)、台湾(5名)、中国(53名)、日本国籍(1名)

まなびの待ち時間

利用者ボイス

私は今、福祉作業所で障がいのある方の作業サポートをするボランティア活動をしています。ボランティアをやりたいと考えようになったきっかけは「オンラインだんらん」に参加したから。「オンラインだんらん」のスタッフは日本語学校の学生として来日した私に熱心に意欲的にいつも接してくれた。そんな姿を見て私も何か自分で人助けをしたいと考えて区役所へ向かいボランティアを探した。ボランティアをする立場になり、より日本語でのコミュニケーションを取る機会が増え、人助けのつもりではじめたが今では自分の生活にも繋がっていると感じています。

スタッフボイス

「大学生になったら何かボランティアがしたい」漠然とそう考えていた。しかし、世はコロナ禍…。人との対面での接触が最低限になりそんな中でも何かできることはないかと模索。「オンラインだんらん」を見つけた。授業スタッフとして外国の方に1対1で日本語を教える活動だった。オンラインでも参加者の方からの確かな感謝な声を受け取ることができとてもうれしかった。「誰かのために何かしたい」そんな思いがあれば社会がどんな状況であれ誰かの力になれることを感じる事ができた。

外国人アウトリーチ

アウトリーチとは積極的に対象者のいる場所に出向いて必要なサービスや情報を届けることです。2014年から、日本語教室だんらんの活動を通じて地域の外国人との接点を作ってきましたが、コロナ禍でオンライン日本語教室の運営を始めたことをきっかけに、関わりを必要としている外国人が地域には多くいるということに改めて気づくことが出来ました。そして、拠点を構えて居場所をつくるだけでなく、拠点を飛び出して会いに行く、外国人アウトリーチ事業がスタートしました。



食糧支援

コロナ禍、またその後の物価高騰、燃料高騰による生活苦を抱える留学生を対象とした事業です。月に1回、神戸市中央区にて、主に日本語学校に通う外国人留学生に対し、米4キロやその他の食糧を無料で配布しています。配っている会場で個別の生活相談に応じたり、外国人留学生の実態を把握するためのアンケート調査を行ったりすることで、彼らの日本での生活をサポートできる支援体制の在り方を模索する事業にもなっています。

- ・活動日数:4回
- ・利用者数:224名
- ・利用者数延べ人数:360名
- ・スタッフ数:45名
- ・利用者属性:ネパール(98名)、バングラ(29名)、その他(97名)

居住支援

外国人の居住をサポートする事業です。住宅確保要配慮者に対する賃貸住宅の供給の促進に関する法律(通称:住宅セーフティネット法)に基づき、居住支援を行う法人として、兵庫県から指定を受けて活動を行っています。物件探し、契約時の不動産屋への同行や、水道、ガス、電気、インターネットなどの利用開始の手続き、家電の手配や居住中のトラブル対応、退去時の手続きなど支援内容は多岐に渡ります。

- ・活動日数:256日
- ・利用者数:21名
- ・利用者属性:フランス(1名)、エジプト(1名)、香港(3名)、ベトナム(2名)、中国(1名)、アメリカ(4名)、ネパール(2名)、ナイジェリア(1名)、メキシコ(1名)、コロンビア(1名)、台湾(1名)、バングラデシュ(2名)、インド(1名)

在住外国人の孤立防止体制づくりプロジェクト

2022年10月～2023年9月まで、日本たばこ産業株式会社様より、SDGs貢献プロジェクトの枠組みで、外国人支援のアウトリーチ体制構築をサポートいただいています。2022年度は、実際に外国人留学生にとって必要な支援とは何なのか、どのようにして届ける必要があるのかを話し合うワークショップを行いました。参加した留学生からは、物資だけではなく情報と人との繋がりが重要なのだということをご共有いただきました。日本語学校や行政職員、支援を受ける当事者を含めたステークホルダーの皆さんと議論を重ねることで、今後の支援体制の基盤づくりができました。



利用者ボイス

日本語学校に無事入学でき、日本での生活は始まったものの経済的余裕はなく、そんな中での食糧支援を知りました。経済的余裕がないから食糧をもらえることに感謝していることはもちろん、学校の外で日本語を話す機会がない私にとって日本語を使う大切な時間になっています。この食糧支援で日本人のスタッフと話せる場があるおかげで、自分の日本語力にも少し自信ができました。

スタッフボイス

私は大学で心理学を学んでおり、特に外国人のメンタルケアに興味を持ったことがきっかけで、この活動に関わり始めた。食糧支援の場では、主に生活相談に携っており、留学生たちの生活上の困りごとを聞きながら、相談に乗っている。解決が難しい問題を抱えているケースもあるが、悩みを聞いたり、一緒に話をすることで、「少しでも彼らの気持ちが楽になって欲しい」とそんな思いを持って活動している。今後も、ただ食糧を配布するだけでなく、この場が留学生にとって、何か困りごとがあった時に気軽に相談ができて、安心できるような場にしていきたい。

利用者ボイス

2022年6月に日本の学校に行くことが決まった私は香港から問い合わせをした。香港にいたのでまずはオンラインでどんな部屋が良いかどのようところに住みたいか話を聞いてもらった。9月、無事日本の新しい部屋を借りることができ生活がはじまった。それからは銀行口座の開設など様々な生活面のサポートをしてもらった。私はとても人見知りだが、そんなたくさんの支援をしてくれた恩返しをしたいと思い、いろんなボランティア活動に参加している。

スタッフボイス

食糧支援で出会った留学生のAさん。“家賃債務保証料等補助”の申請をしたいがよくわからないと相談があった。しっかりと話を聞き彼がその該当者なのか、申請する上でどう困っているのか確認していった。結果、無事“家賃債務保証料等補助”が神戸市から承認された。元々は食糧支援の参加者として出会った彼だったが、このような関わりをきっかけに今ではまなびの他のボランティアに参加してくださるほどつながりが強くなっている。些細なことが大切な人とのつながりになると感じた。

外国人ボランティアコーディネーター

まなびとでは外国人を対象とした支援を行う際に、最終的には彼らがやりたいことを見つけて社会の中で自己実現できることを目指して活動しています。そこで、ただ支援を受けるだけではなく、出来るところから共に活動することで日本社会での自分の役割を見つけてほしいという思いから、外国人ボランティアの受け入れやマッチングを積極的に行っています。



まなびとの考える外国人を対象とした支援



共生型の地域を支える外国人人材発掘、伴走型支援事業

地域にいる留学生は潜在的には活動的で社会貢献力も高い人が多いです。ですが、生活が安定せず、自分の周りの地域の課題に触れる経験も少ないため、地域課題を解決するアクションを起こすことが難しい現状があります。そこで、食糧支援や居住支援を通じて生活を安定させることができた留学生に対して、日本語教室だんらんやちいき食堂の活動を通じて地域の課題に触れてもらい、その課題を解決するための活動にボランティアとして参加してもらえるようにコーディネートしていく取り組みを2022年度から行っています。

2022年度は、食糧支援のボランティアやまなびと文化祭WASSHOI!の運営ボランティア、ちいき食堂のボランティアなど様々な形で外国人の方が実際に一歩を踏み出して活動を行いました。

スタッフボイス

初めて食糧支援の場に訪れた時に、「自分も何かできることがあれば手伝いたい」と思い、毎月ボランティアスタッフとして、食糧を受け取りに来た留学生への案内や通訳、食糧支援についての情報をネパール語に翻訳してSNSで発信をしています。物価高の影響もあり、想像以上に日本での生活が厳しく、苦勞している留学生の友人もいます。自分も留学生ですが、より多くの留学生にこの支援が届くように、これからもボランティアスタッフとして、この活動を手伝ってまいります。





CAFE & BAR まどろ



日々の暮らしに小さな出会いを生み出す

「まなびに関わっている人や、その周りにいらっしゃる地域の方がふらっと気軽に会える場所を創りたい」そんな想いで2021年にオープンしたCAFE & BARまどろですが、通常のカフェやバーの営業に加えて今年度から定例イベントを始めました。今年度開催したイベントのいくつかを紹介させていただきます。

#午後5時、まどろにて。

合言葉は午後5時、まどろにて。待ち合わせをするように、今まなびに関わっている人や関わってみたい人が集まってお互いの近況をシェアする、ゆるりとしたイベントです。

学生時代にスタッフとして活動していたOB・OGや、日頃からまなびのことを応援してくださっている方が月に1回、ふらっと立ち寄り、共に時間を過ごす場を創っています。

まどろであまやどり

神戸市中央区やその近隣地域で、「自分のやりたいこと」をお仕事にされている方をゲストに招き、中山と対談形式で語るトークイベント。就職活動をしている大学生や20代～30代の若者向けに、自分のやりたいことを考えられる「居場所」と「出会い」を届けます。

今年度は、5名の方をゲストスピーカーにお招きし、それぞれのこれまでのキャリアについて、やりたいことをやるためにどんな選択をしてきたのかなどをお話いただきました。

○ゲストスピーカーの皆様

NPO法人Piece of Syria代表理事：中野 貴行さん

一般社団法人イドミイ代表：高橋 惇さん

株式会社ふたごじてんしゃ：中原 美智子さん

神戸カレー食堂ラジクマール：片山 絢一さん

NPO法人コミュニティリンク：高山 秋帆さん

ぴーちくぱーちく

自分の話したい言語で自由にコミュニケーションが取れる大人の国際交流イベント。神戸に住む留学生や社会人、20代～40代まで幅広い年齢層の方が参加し、語学が堪能でなくても、参加しやすいアットホームな雰囲気の中で自分の話したい言語を使いながら新しい人との出会いを楽しみました。



ちいき食堂 ちいき食堂



食を通じた交流の場

ちいき食堂は、学童保育や遊び場に通う子どもたちやその親御さんは勿論、日本語教室だんらんなどの事業を通じて関わっている外国人、また、まなびとで活動している大学生や、その活動を支えて下さっている地域の人と一緒にご飯を食べる活動です。ご飯を作る人も、参加する人も毎回違う顔ぶれですが、何気ない会話を通じて、人と関わることの楽しさを一緒に味わえる、そんな空間を創ろうとしています。

- 活動日数：100日
- 利用者数：57名
- 利用者延べ人数：約460名
- スタッフ数：30名



まなびの待ち時間

利用者ボイス

まなびとの食糧支援に訪れ、生活相談ブースで「日本人の友達ほしい」と相談したところ、ちいき食堂を紹介してもらった。現在、日本語学校に通っていませんが、周りのクラスメイトは自分と同じ外国人ですし、アルバイトもしていないので、なかなか日本語学校の外で日本語を話したり、日本人と出会う機会がありません。初めて、ちいき食堂に参加した時は、自分の日本語にも自信がなかったので少し緊張しましたが、日本語がまだカタコトな自分のことも受け入れてくれる空気感に安心しました。僕にとってちいき食堂は新しい人との出会いと、日本語を練習できる場です。

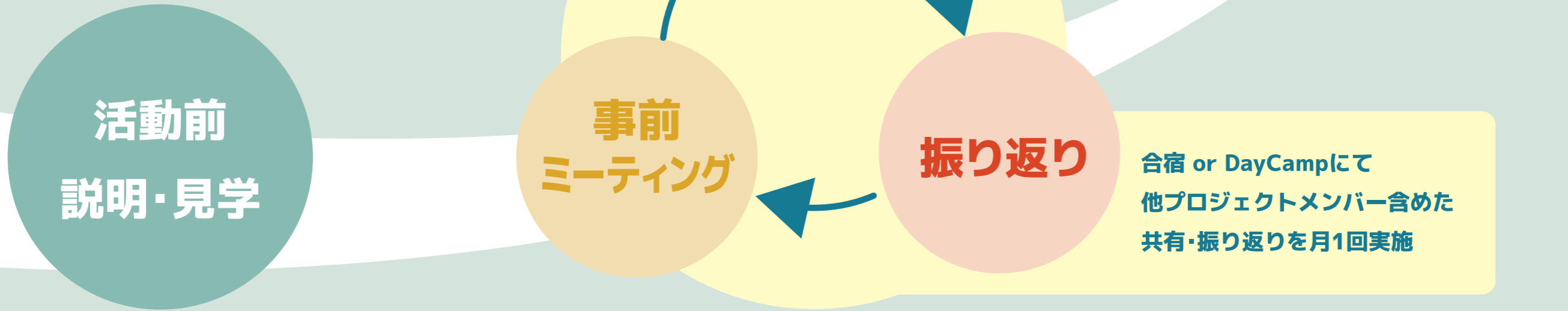
スタッフボイス

元々は食料支援で繋がった留学生。「日本語学校で勉強しているけれどもっと日本人と関わりたい」と相談された。子どもから大人まで集まるちいき食堂に遊び来てみたいとお誘いし、夕飯づくりのボランティアから参加してくれた。「(キャベツを手でさきながら)この動作は日本語で何て言うの?」そんな質問をしながら、新しい出会いを楽しんでくれた。初めて出会った時は「日本語に自信がない」と英語でのコミュニケーションがメインだったが、この日は他の参加者と日本語を使って交流している姿があり、とても心が温かい気持ちになった。

大学生スタッフとまなびと

大学生にとっても学べる場であるために...

まなびとの大学生スタッフ育成プログラム



関わる大学生にとっても“学べる場”であることをまなびとでは目指しています。ただ単にその日のボランティア活動をこなすのではなく、日々の活動を内省・共有する機会を提供するサイクルを回すことで“学び”に繋がっています。

また、年間の自身の“学び”を年度末に全体で振り返る“報告会”を開催し、他のメンバーから“学び”を享受し、共に活動しているメンバーの価値観にも触れることができます。



日々の活動ルーティン

日々の活動の前に必ず事前ミーティングを実施。その日の活動での注意事項、目指すべき項目や目標を共有。実際の活動を行うに当たり事前に考えて実行に移す習慣にしている。
活動後に振り返りを実施することで事前ミーティングで確認した内容が実際にどうだったかを振り返り、次回以降の活動に繋げて今後に生かしていく。



合宿

毎年9月に上半期の振り返りの機会と合わせて合宿を設定。DayCamp同様他のメンバーからの学びを受け取るだけでなく、合宿の企画を実行担当が行うことで大学生自身の企画立案力・協働力醸成を狙っている。

Day Camp(月に一度の全体ミーティング)

日々の活動では関わらないメンバーとの交流の場を月に1度意図的に設定。別のプロジェクトでの学びを享受した上で自分事として捉えより一層多様な視点を持って日々の活動に繋げることを狙う。



報告会

年間の学びの集大成を共有する場として“報告会”を実施。各プロジェクトから代表者が発表するだけでなく、発表を聞いて個々で感じたことをシェアしながら翌年の活動、まなびと卒業後の自身の人生に“まなび”を繋げていく。

メンター支援

報告会発表者1人につき、1人ずつ社会人のメンター支援制度を設置。学生が発表に向けてこれまでの活動を振り返る際に言語化の補助や深掘りを第3者視点で共同することでより深い“まなび”に繋げる。

まなびと文化祭WASSHOI!



みんなで踏み出そう!「好き」につながる小さな一歩

2023年2月11日、3年ぶりにまなびと文化祭WASSHOI!を開催しました。まなびと文化祭WASSHOI!とは、まなびとが運営する北野くん家の子どもたち、日本語教室だんらんの外国人やボランティアスタッフの大学生が、それぞれの活動を通して見つけた新しい自分や、成長したこと、好きなことを披露するイベントです。

ステージで歌を披露してくれた外国にルーツを持つ子どもは、ステージに出ると決めた時、披露する日本語の曲を知らませんでした。大学生スタッフと個別に歌詞の読み合わせから練習を重ね、当日はステキな歌声を披露してくれました。

バンド演奏・ダンス披露では、北野くん家の子どもたちと日本語教室だんらんの外国人と一緒にステージを創り上げることで、イベント終了後も互いに挨拶をするようになるなど、普段関わりの少ない彼らの交流を生み出すことができました。

他にも、日本語教室だんらんに通う外国人が、「色々な国のことが知れるブース」の出展物を作成したり、飲食ブースではちいき食堂のスタッフと子どもが試作をしたりと、準備段階から、まなびとに関わる子ども、外国人、大学生みんなが関わりを持ちながら創ったイベントです。

当日は、子どもから大人まで、国籍を問わず会場内で混ざりあい、異なる生活背景や文化的背景を持った人たちが交流する多様性に溢れた場を創ることができました。



参加者: 188名
スタッフ数: 69名

まなびとの待ち時間

利用者ボイス

コロナ禍で久しぶりの開催だった「WASSHOI!」に家族で参加しました。一人っ子で人見知りだった娘が「北野くん家」で活動するうちに皆さんと家族やきょうだいのようコミュニケーションを取るようになり、「WASSHOI!」では年齢・性別・国籍に関わらず、一緒に笑っている姿が印象的でした。イベント開催は楽しいだけでなく失敗や苦勞を伴うものですが、参加する皆さんがお互いを尊重し、思い助け合う優しさを随所で目にしました。「地域の異文化交流」の場としてだけでなく、人として大切なことを学ぶ場になっているのですね。これからも続けていってほしいと思います。

スタッフボイス

母国に住んでいる時、子ども向けイベントの企画・運営などをした経験があった私はWASSHOI!の企画・運営に声をかけてもらい、そこで台湾についての紹介もしたいと思い活動に参加しました。日本語を使ってイベントの企画・運営は初めての経験で、語学面で苦勞がありました。当日、自分のブースに沢山の子どもたちが集まってくれました。自分の日本語が通じているのか、不安な部分もありましたが、子どもたちの笑顔や表情から、とても楽しんでくれている様子が伝わってきました。完璧な日本語を話せなくても思いが伝わることを感じとても嬉しかったです。



2023年に向けて



理事長 中山より

2023年度は、アウトリーチ型の支援の専門性を高めることと、居場所としての人の交流の活性化の二点が求められます。アウトリーチ型の支援に関しては、2022年度から実施している外国人留学生向けのアウトリーチ事業は継続していきます。関わった彼らが日本の社会で就職して、自己実現できるまでの縦断的支援をイメージして動いていきます。そのために、彼らの生活に対して現在行っている食、居住、言語、コミュニティの面だけではなく、「心・体の健康」と「キャリア」の面でサポート出来る体制を実現します。また、2023年度からは外国ルーツ青少年に対する支援も本格化します。すでに学童保育でも外国ルーツ青少年の受入れ実績はありますが、今後はさらに受入数が増える見込みで、子どもたちに向けて日本語学習支援や学校教科の学習支援、またアイデンティティ形成における文化背景理解や多文化共生の取り組みに関しても、他の活動団体や他地域の事例を参考にしながら、実施します。また、学童保育での外国ルーツ青少年支援事例を作ることで、日本全国の学童保育における支援体制の礎になりたいと考えています。

さらに、2023年度はこれまでの子ども、外国人、大学生、に加えて「親」「家庭」がテーマになってきます。子育て家庭向けに食糧支援を通じてつながることで、子どもたちをまなびとの居場所に繋げることはもちろん、一人親家庭など深刻な状況にあるご家庭向けによりきめ細やかな支援が出来るよう、体制を整えていきます。

コロナ禍は終わりを迎えようとしています。まだまだ先の見えない社会情勢の中で、すでに今取り残されていて、声を聴いてもらえず、存在を知られていない人たちがいます。そういった人たちと確実に繋がりを、ただ生きるだけではなく、生きようと思える状況を作っていくためには、彼らにより多くの人たちと関わり、受け入れてもらいながら「待ち時間」を過ごすことが必要です。まなびとが立ち上がった時から大切にしている、どんな人でも関わる事が出来る居場所をこれからも続けていくために、2023年度も一人でも多くの方と活動を共にできれば幸いです。皆様、今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

2022年度を振り返って

総括

2022年度は、体制の整備とアウトリーチ事業立ち上げの準備ができた1年でした。それを可能にした一つの大きな要因が人員配置です。2014年度から2020年度までは正職員を1〜3名で運営してきたところ、2021年度は6名体制、2022年度は年度途中で2名を加えて8名体制で運営できました。それに伴い、障がいを持つお子さんの受入れを強化したり、大学生スタッフの振り返りに職員を充てたり、と既存の取り組みの質を上げることができました。また、イベント企画などを通じて、居場所的な事業から一歩踏み出す取り組み、やってみたいことについて語ってみたり、実際にチャレンジしてみたり、

といった場を創ることが出来ました。こちらは、コロナ前にも小さな規模でやっていたことをより多くの人を巻き込んでの実施となりました。一方、コロナ禍が終わりに近づくにつれて対面の活動が活性化していく中で、地域における対面支援が求められてきています。これまで通り場を持つだけではなく、その場を真に必要な人と地域でどうやって出会い、繋げることができるのかということのチャレンジがまなびととしても始まっています。いわゆるアウトリーチ型の事業が今後まなびとの支援フローの中に入ってくるであろう中で、2022年度はその準備として、地域の日本語学校や行政とのつながりを作ることができました。

【2022年度のまなびとニュース】

1. 居場所を必要としている個別のケースに対応できた事例が2件ありました。

今年度から強化している学童での障がいをもつお子さんの受け入れ強化しています。その枠で登録していた児童が通う、他法人が運営する放課後等デイサービスが年度途中で急遽閉鎖してしまい、日々のルーティンが崩れてしまう事態が発生しました。それに対して、これまで放課後等デイサービスに通っていた時間も学童に通うことで居場所を確保し、また個別対応の職員を充てることで子

どもにとっても安心して過ごせる時間を提供することができました。もう1件は、別法人との連携により、学習支援を必要としているお子さんの受入れが実現しました。こちらは放課後学びスペースアシスト神戸北野校に来ていただいています。別法人とお子さんのご家庭の様子なども共有を受けながら、その子本人にとって必要な居場所となれるよう、支援を行える体制が取れています。

2. まなびと文化祭WASSHOI!復活

コロナ禍で2年間実施が出来なかった、まなびと文化祭WASSHOI!を開催することができました。前回のWASSHOI!を経験しているのが代表1人だけ、という状況の中で、以前の様子なども共有しながら、学生スタッフ、職員が一丸となってイベン

ト企画を行いました。神戸モーニングロータリークラブとの共催という形で、準備段階からご協力いただき、様々な企画を実施することができました。またイベント当日はワイズメンズクラブ神戸ポートクラブの皆さんも応援に来てくださりました。

3. ちいき食堂復活

コロナ禍では、必要としている子どもたちのためだけにご飯を提供する小規模な活動に留めざるをえませんでした。けれども、対面の活動が認められてくる中で、2023年2月からまなびと北野基地1階のCAFE&BARまどろみを用いて実施することができました。

子どもだけでなく、地域の方や大学生、外国人留学生など、まなびとの活動に興味を持ってくださる方たちの交流の場として、すでに多くの方にお越しいただいています。

4. 外国人向けのアウトリーチ事業が本格化

2022年12月の物価高騰、燃料費高騰を受けて、留学生向けの食糧支援の事業がスタートしました。これまで日本語教室だんらんを運営してきた中で繋がっている地域の日本語学校との連携を活かし、初回から100名

近くの留学生に支援を届けることができました。今後、アウトリーチで繋がった人たちとどのようにして継続的で発展的な関係性を築いていくかが課題となってきます。

5. 大学生スタッフの活動の場としてもステップアップ

コロナ禍でスタッフ間の交流も思うように進まなかった中で、限られた時間の中でも自己探求が行えるように、環境を整備しました。一つは学童における日々の振り返りで、振り返りシートの作成を行いました。これまでは単に子どもたちの様子を共有するだけの振り返りでしたが、子どもたちについての情報共有だけではなく、その日一日活動してみてスタッフ自身にどのような気づきや発見があったか、また今後どのようにそれを活動に活かしていきたいのかを共有する時間を取るよう、振り返りシートの質問項目を変更しました。また、日々の活動ではなかなか他の活動に参加しているスタッフやOB・OGなど過去の活動に参加していた人たちとの情報交換ができない、という状況を受けて2泊3日のキャンプ合宿を実施しました。キャンプ中の

アクティビティを通じて互いをよく知り、また過去の活動や現在の活動の状況を皆で共有することで活動への関わり方や意義の再確認を行うことができました。そして、年度末には活動報告会を今年度も実施しました。活動してきた大学生スタッフが自身の学びについて発表する機会として毎年行うものですが、2022年度は初めてメンター制を導入しました。発表担当者一人につき一人のメンターがつき、発表づくりをサポートしてもらうことで、発表するスタッフも内省を深めながら自分の言葉で発表することができていました。彼らの言葉を受けたスタッフ一人ひとりや、地域の方々もまた今後どのように活動を生み出していくのが非常に楽しみです。

ご寄付のお願い

まなびとが創る“待ち時間”は、皆様からのご寄付で支えられています。

自分のやりたいことが見つからないまま、孤立してしまう人に対して、彼らが孤立せずに安全な居場所を得て、多様な人との関わりを手にすることが出来るよう、まなびとの“待ち時間”を支えてください。

ご寄付の方法

以下の三つの方法があります。

① マンスリーサポーター

マンスリーサポーターは、毎月決まった金額を寄付することで、まなびとの活動を継続的にサポートできます。(毎月1,000円～)

マンスリーサポーターになるとまなびとで開催される交流イベントのご案内をお送りします。サポーター同士の集いの会にご招待いたします。毎年の活動報告書を送らせていただきます。

※まなびとは、神戸市の認定を受けた「認定NPO法人」です。
認定NPO法人へのご寄付は、税控除の対象となります。

こちらのQRコードより
お申込みください



② 単発寄付

単発のご寄付も受け付けております。

※まなびとは、神戸市の認定を受けた「認定NPO法人」です。
認定NPO法人へのご寄付は、税控除の対象となります。

こちらのQRコードより
お申込みください



③ ふるさと納税で寄付する

神戸市へのふるさと納税を行う際に、寄付先の団体指定を行うことが出来ます。まなびとは寄付先の団体として登録されています。

こちらのQRコードより
お申込みください



頂いたご寄付の使途について

お寄せいただいた寄付金は、事業運営や事務局内での諸経費等、団体内の活動においてのみ使用いたします。また、寄付金を含めた活動費および事業の詳細を、活動計算書および事業報告書により、ホームページにて公開しています。